

福島県植物研究史

1. 明治以前

人と植物とのかかわりは、古くからきわめて密接な関係にあって、衣食住のすべてを植物に頼ってきた。植物の有用度は経験と伝承によって得ていた。学問としては江戸時代からであろう。江戸時代になり、戦乱はおさまり、徳川家康は文教を奨励した。慶長12年(1607)儒者、林羅山が長崎で中国の本草書『本草綱目』を得て、家康に献上した。本草綱目は李時珍が中国の薬物知識を集大成した本で、薬木・薬草に関することが大部分を占めている。その記述は「釈名」(別名をあげてその出典を注記し、名称の由来や字義を注記)、「集解」(薬物の産地・形状・鑑別・採取)、「正誤」(薬物についての本草家の論争。時珍の見解)、「修治」(薬物の調整加工法)、「気味」(薬物の性質・有毒・無毒)、「主治」(薬物の効能についての諸説・出典)、「發明」(時珍および諸医者・本草家の薬効諸説)、「附方」(処方)、「附図」からなり、薬用植物を知る上に大いに役立った。医者ばかりでなく、儒者も学識を広めるために本草を学ぶようになり、本草綱目の和訓本も出版された。そのほか、多くの本草書が渡来した。そこで日本の本草研究者は中国の本草書にある薬物は、日本の何にあたるかの研究を行い、日本の本草学に発展した。しかし福島県からは名のあつる本草家は出ていない。

輸入薬用植物の需要が多くなり、わが国に自生する薬用植物を山野に求めて採薬が行われるようになり、本草の知識が必要になって、中国の本草書だけでなく、貝原益軒の『大和本草』など日本本草書が重宝した。輸入薬用植物の自給をはかるため、幕府をはじめ、諸藩で薬園を設けた。会津藩では、寛文10年(1670)藩主の別荘に薬園を設け、幕府から下付されたオタネニンジンの栽培をした。白河藩主松平定信が老中となり、寛政2年(1790)官園の薬草種苗の頒布を許し、薬草栽培を奨励した。会津藩では寛政年間(1789-1800)本草家、佐藤成裕を招いて薬草栽培にあたらせた。佐藤成裕(1762-1848)は中陵と号し、諸国を巡って、天産物を採取し調べていた本草家である。米沢藩の囑を受けて天産物を調べたとき、寛政5年5月26日吾妻山の頂上をきわめ、ハイマツを見てその生態を適切に観察記録している。寛政9年(1797)『中陵漫録』に記述したのがハイマツに関しての最初のものであろう。

本草は、元来薬物となる自然物の記載学であり、薬用植物の研究が主である。中国の本草は日本産のどの自然物にあたるかの検討が行われ、薬物の漢名と和名の照合が本草学の一大分野とな